



図1 子どもの問題行動の発現に関するモデル

児童・青年期は、抑うつ、不登校、自傷行為、攻撃性、非行、いじめ加害など、メンタルヘルスに関わる多様な心理社会的問題が顕在化・深刻化する時期であり、この時期の心理社会的適応の悪化は成人期以降の適応をも強く予測する。そのため、児童・青年期のメンタルヘルスの問題の発生機序を明らかにし、その予防・介入の方策を見出すことは重要な社会的課題である。発達過程の複雑な因果的メカニズムの検証に際して、最も有効な手立てを提供する研究手法の一つとしてコホート研究(縦断研究)がある。当研究室では、中京大学現代社会学部の辻井正次教授との共同研究として、乳幼児から中学生まで約1万人の子どもの対象とした大規模コホート研究を継続実施し、この問題にアプローチしている。

【研究テーマ】

- 問題行動の発現メカニズムの解明
個人が生来的に有している発達障害特性や気質などの個人内リスク要因と、個人を取り巻く家庭、友人、学校などの環境リスク要因の複雑な相互作用による問題行動発現メカニズムの解明を進めている。
- ユーモアの発達に関する研究
- 発達障害特性のアセスメント手法の開発
- 問題行動リスクの評価手法の開発

キーワード

メンタルヘルス、いじめ、不登校、自傷行為、摂食障害、発達障害、ユーモア(笑い)

相談に応じられる内容

子どもの問題行動の予防・介入策、問題行動リスクの評価、発達障害特性のアセスメント、社会科学データの多変量解析、ユーモア(笑い)の生起メカニズム

独自HP

